

eye

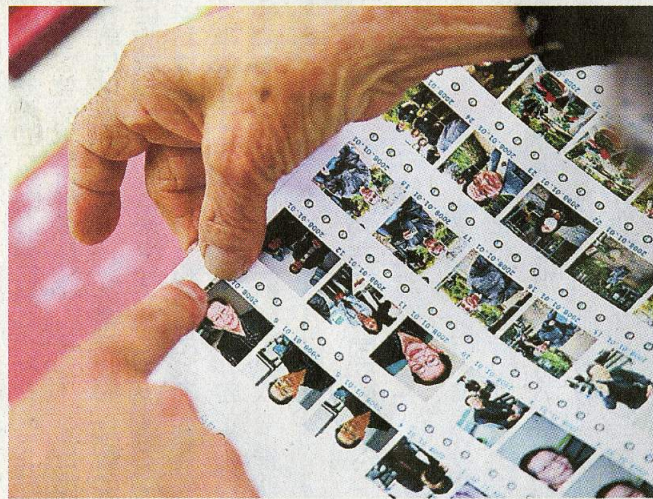
「はい、チーズ」。右手が動かなくても左手が動けば写真が撮れる。「きれいに撮ってね」



半身障害の男性は左手だけで撮影 夢中になりつえを忘れ歩く女性も



写真は自由だ！
写真セブピーでは撮り方も人それぞれ



自分のお気に入りの写真を選ぶ

「若返りました」
「かみさんにほれ直されます」

「若返りました」。「かみさんにほれ直されます」。口々に喜びの声をあげながら、高齢者が「作品」を見せ合う。心身のケアのため茨城県桜川市の介護老人保健施設・マカベ・シルバートピアで行われている「写真セラピー」に参加した。

この日のテーマはお互いを撮り合うこと。男女3人ずつがコンパクトデジタルカメラの前に並んだ。主催するNPO日本写真療法家協会の代表・酒井貴子さん[1]が使い方を説明する。今年6月以来、何度も参加しているメンバーだが、カメラの操作に四苦八苦。「機

械はわかりません」とぼやきも聞こえる。しかし、写真を撮り始めると表情が明るくなっていく。病気で右半身に障害がある男性は左手だけで懸命に撮影。夢中になってつえを忘れて歩き出す女性もいた。次第にぎやかになっていく。

撮影が終わると、写真を画用紙に張り付けて装飾する。皆が子どものように作業する中、「病気で言語障害を持った人が積極的に会話して写真を撮った人」が笑顔で撮影する姿には感動する。写真の力を感じます」と、見守る酒井さんの

老人保健施設の
写真セラピー



「上手に撮れとる」と上機嫌



「きれいに写ってますよ」

おとわり
来週31日
の「eye」
は休載します。次回は
1月7日です。

写真・文 梅村直承

「生きる力を喚起」「写真セラピー(写真療法)」はNPO日本写真療法家協会を07年に設立した酒井貴子代表が提唱する独自の療法。写真を撮り、自ら好きな写真を選んでプリント。できあがった写真を30センチ四方の画用紙に張り付け、シールやリボン、ボタンなどで自由に飾り付け、言葉を添える「スクラップブック」をする。アートセラピーの考え方に基づき、写真を通した自由な自己表現を楽しむことで、対象者が自ら癒やされ、自信や意欲など、生きる力を喚起する方法。写真技術は必要とされず幅広い人が参加できることも利点だ。同協会(03・3755・2085)は終末期医療施設、こども病院院内学校、老人介護施設などを対象に全国9カ所で活動を展開している。カメラやプリンターなどは協会が準備、ワークショップを実施する。ファシリテーターの養成にも力を入れ、全国で58人が活動中。マカベ・シルバートピアでは2グループがそれぞれ隔週で参加。心身の改善が目覚ましいという。